図書館員の四季：私のシネマ探訪

『ギルバート・グレイプ』（なんとも切ない兄弟愛、家族愛）

『グランブルー』（海とイルカが美しい。真夏に見ると涼しさを感じるのでは？）

『フランキー＆ジョニー、恋のためらい』（渋い大人の恋物語。バックに流れるドビュッシーの「月の光」がまた良くて、帰りにＣＤを探してしまった）

『陽のあたる教室』（人は人の心に大きなものを残せるんだなあ）

これらはシミジミ度、ホノボノ度が高く、見終わって心の中で（いやぁ、映画って本当にイイもんですねー）とつぶやいた印象深い作品。皆さんも、お勧めのものがありましたら、ぜひ教えて下さい。

◇　◇　◇

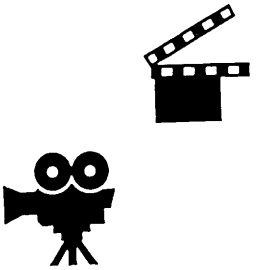
『軽　　蔑』
Jean-Luc Godard (1963)

国立京都病院
小田中　徹也

尊敬し愛する夫が家庭外で見せた矮小性に軽蔑を感じていく妻の葛藤と不貞。・・・

芸術には妥協を許さないはずの脚本家の夫が、小切手をちらつかせる傲慢な俗物プロデューサーの作品論に対して後退していく。彼女は次第に不信と軽蔑感を深めるのだが、夫はそれを理解できない。しかも、そのプロデューサーは彼女にあからさまな興味さえ示すが、それをも夫は腑甲斐なく許している。結局、彼女はプロデューサーとの不貞行為という形で夫と自己への復讐を通じ葛藤からの脱出をはかるのだが。もっとも、妻の不貞は後にエマニュエル夫人の浮気によって社会的に認知されてしまった。ほんとか？

バルドーの官能的な白い肌、眼に染みいるカプリの青い海。仄暗く甘美なテーマ音楽、ホメロスからブレヒトまで引用の数々。ユリシーズとペネロペの夫婦関係を重ねた物語の高い格調。夫婦愛のロマンティシズムを逆説的な手法によって表現した、あの時代らしい仏映画で、モラビア原作の'60年代前半のゴダール監督作品。こうした傾向の映画は他にもアントニオーニをはじめ当時は結構あったし、熱心なファンも多かった。

『卒業』のような結婚するまでを描いたアメリカ映画に対し、結婚してからを描いたこうしたヨーロッパ映画は、大人の映画といえばそれまでだが当時も今も一般的にはあまりうけない。観客の参加を要求する「大人の映画」で疲れるより、血沸き肉踊る「子供の映画」で涙と笑いに暮れスカッとして、明るい明日をむかえたいのである。・・・

５年ほど前、VZ-Editor の軽快さに悪のりして映画評を気取った雑文です。今読み返すと気恥ずかしい限りですが、難解な作品を好んで観ていた昔を懐かしく思いだします。